

茶 炭疽病について



図1 発病葉



図2 炭疽病の分生子

1 生態

炭疽病 (*Colletotrichum theae-sinensis* (Miyake) Yamamoto) は茶の重要病害で葉のみに発生する。本病は樹上に残った前年の罹病葉内で越冬した菌糸が第一次伝染源となる。春期に越冬病斑に作られた胞子が風雨によって飛散し、新葉裏面の毛茸（もうじ）より感染する。初期病斑は感染部位周辺に退緑斑がみられ、その部位の葉脈は茶褐色となる。病斑はしだいに拡大し、不正形な暗緑色となり、その後、赤茶色の大きな病斑（図1）となる。病斑は古くなると灰白色となり表面には小黒点（分生子層）が形成される。

分生子は雨によって飛散するため、梅雨時や秋雨時に発生が多くなる。特に秋期に多発すると翌春の被害が大きくなる。

本病の潜伏期間は15～25日と長く、発病前に摘採すれば被害とならないが、摘採が遅れると品質や収量に大きな影響を与える。

2 発生状況

本病の生育適温は20～30℃で春期から秋期までの長期にわたり発生がみられる。風雨により飛散した胞子は多湿条件（濡れ時間10時間以上）で感染するため、新芽発生時に降雨が多いと発病が多くなる。

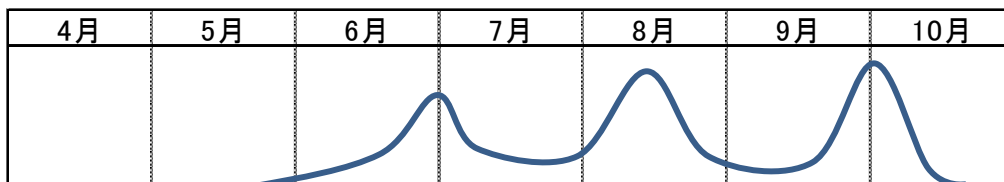


図5 炭疽病発生消長

3 防除対策

(1) 予防防除の徹底

潜伏期間が長く、病斑を確認してからの防除は困難であるため、新芽発生初期の予防防除を徹底する。なお、散布にあたっては、同一系統薬剤が連続しないようローテーション防除を行う。

(2) 秋期防除

秋期は発芽の不揃いなどによって感染期間が長くなる。特に三番茶、秋芽を摘採しない場合は、多発し、翌春の発生源となるため、防除を徹底する。